

山田隆司<sup>1)</sup>、岡田仁克<sup>1)</sup>、平田公一<sup>1)</sup>、栗栖義賢<sup>1)</sup>、辻 求<sup>1)</sup>、芝山雄老<sup>1)</sup>、  
莊園へキ子<sup>2)</sup>、金村昌徳<sup>2)</sup>、寺井義人<sup>2)</sup>、大道正英<sup>2)</sup>  
大阪医科大学 病理学教室<sup>1)</sup>、産婦人科学教室<sup>2)</sup>

患者：10 代後半

主訴：数ヶ月前からの腹部緊満感と軽度疼痛

家族歴・既往歴：特記事項なし

月経歴：初経・12 歳、周期 28 日型・整

妊娠歴：なし

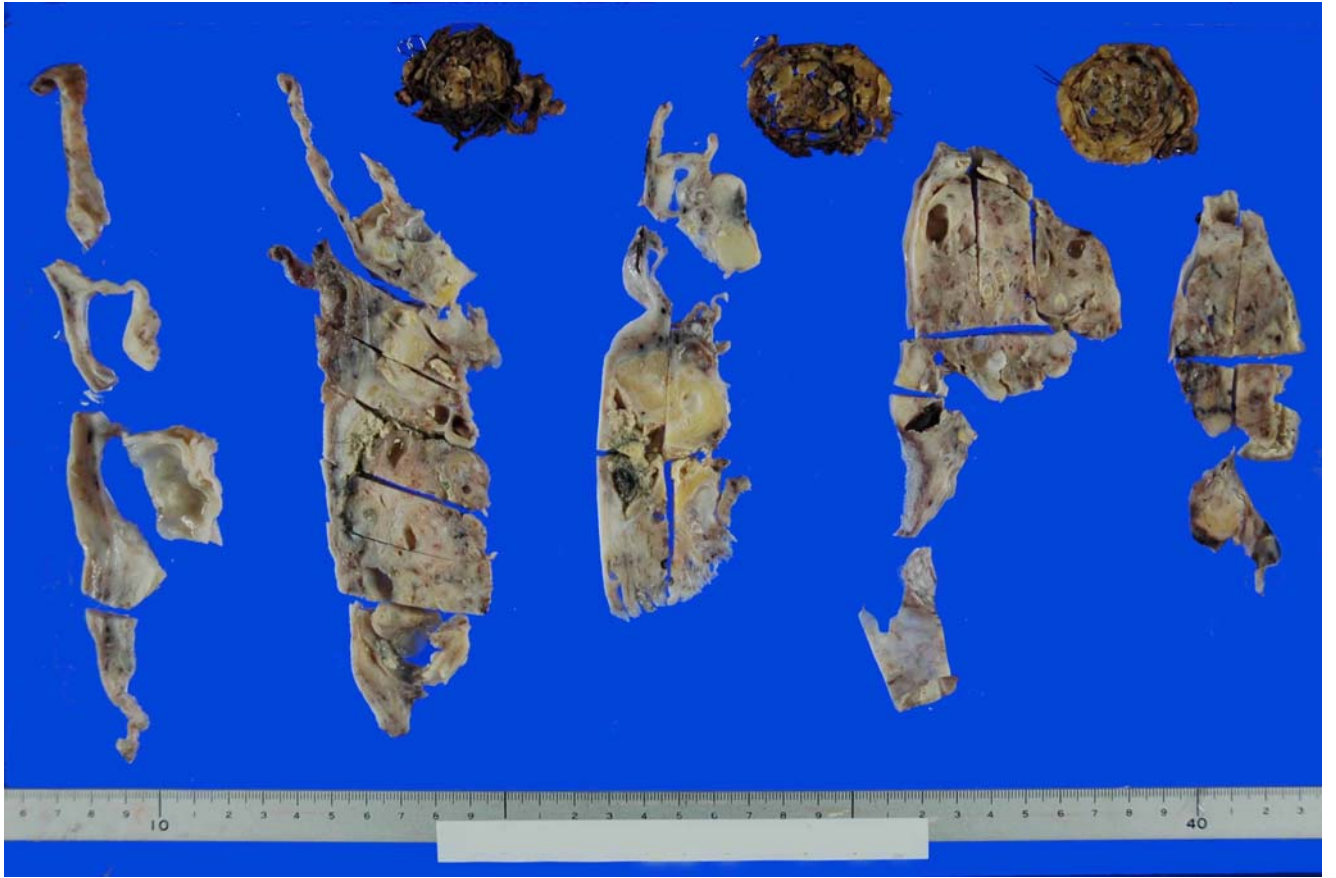
現病歴：上記主訴にて、近医 A 内科を受診したところ、下腹部腫瘍を指摘され、B 病院産婦人科を紹介された。諸検査の結果、悪性腫瘍の疑いにて当大学病院産婦人科に紹介され、摘出手術を受けた。術前の血中腫瘍マーカー値は、CA 19-9: 1510 U/ml (基準値 3.2~36.8), SCC: 4.0 ng/ml (基準値 <1.5), CA 125: 279 U/ml (基準値 4.6~24.5), CEA: 5.9 (基準値 <5.6), AFP: 6.2 (基準値 <15.0)であった。腫瘍は、左付属器の 29×11cm 大の多嚢胞性腫瘍で、術式は腹式左付属器摘出術、部分大網切除術、ダグラス窩小腫瘍生検であった。

組織型、分化度、進行期などが本症例の問題点である。

HE 染色標本（1－腫瘍、2－大網、3－生検）

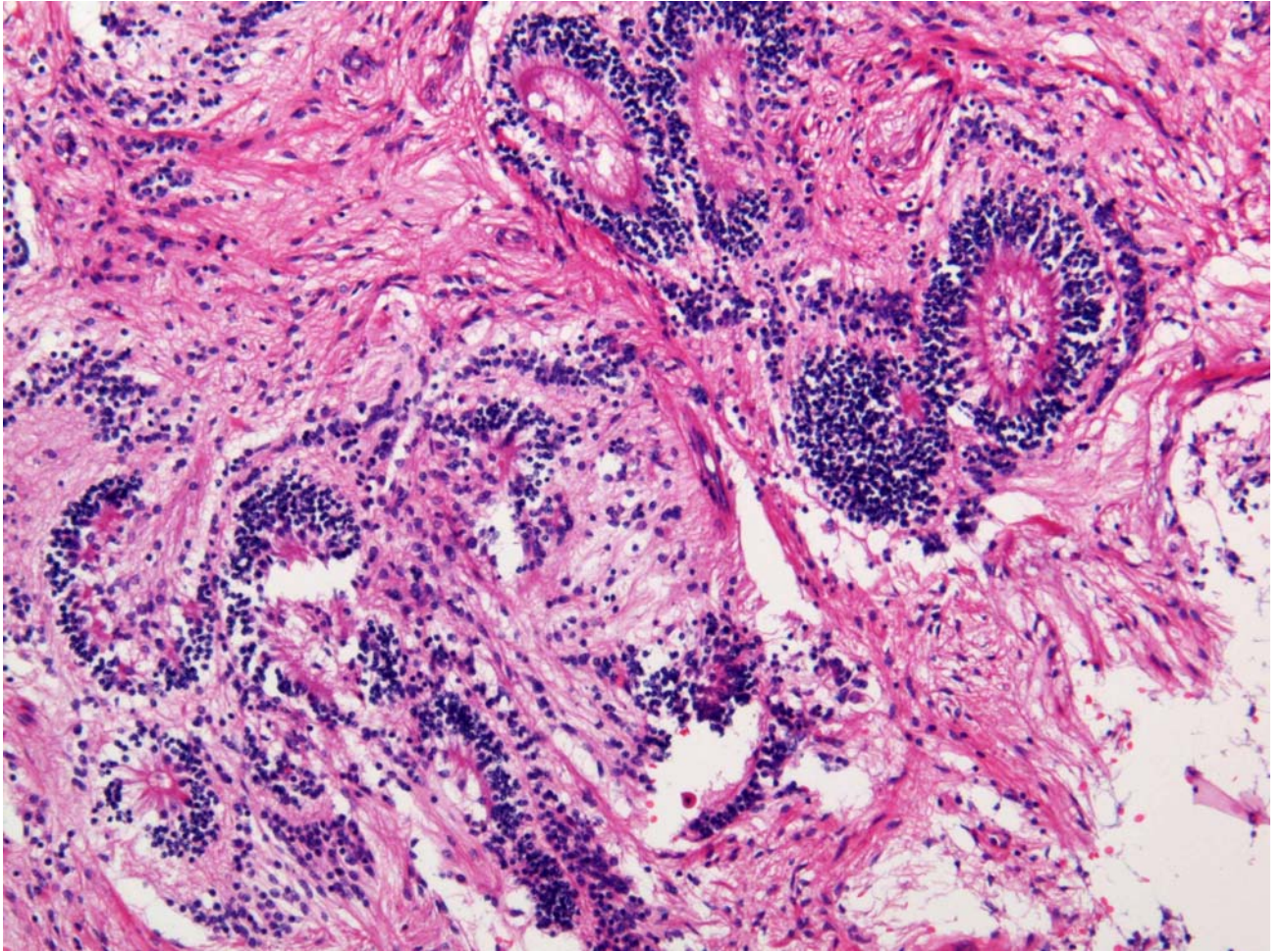


712\_マクロ#1

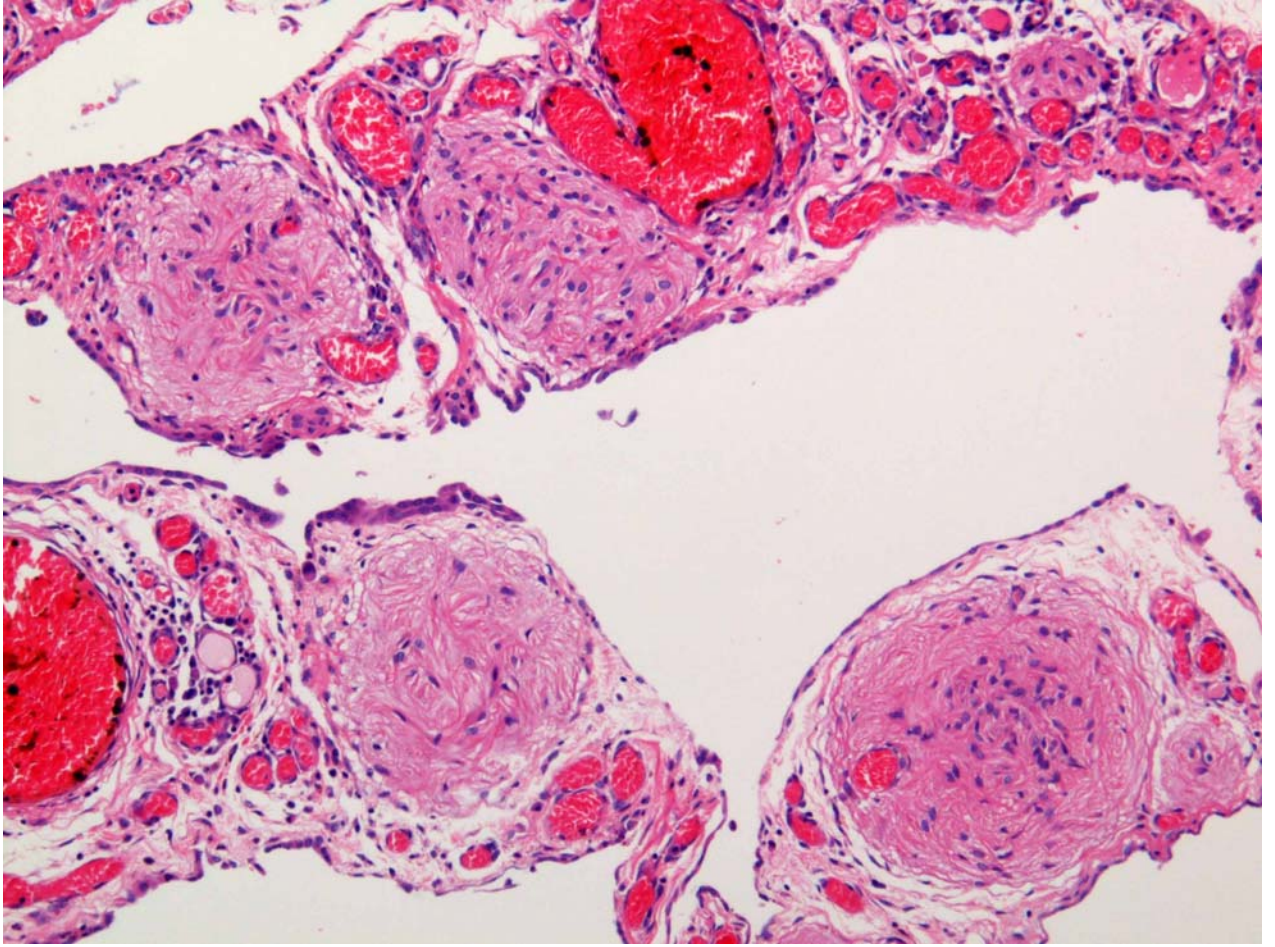


712\_マクロ#2



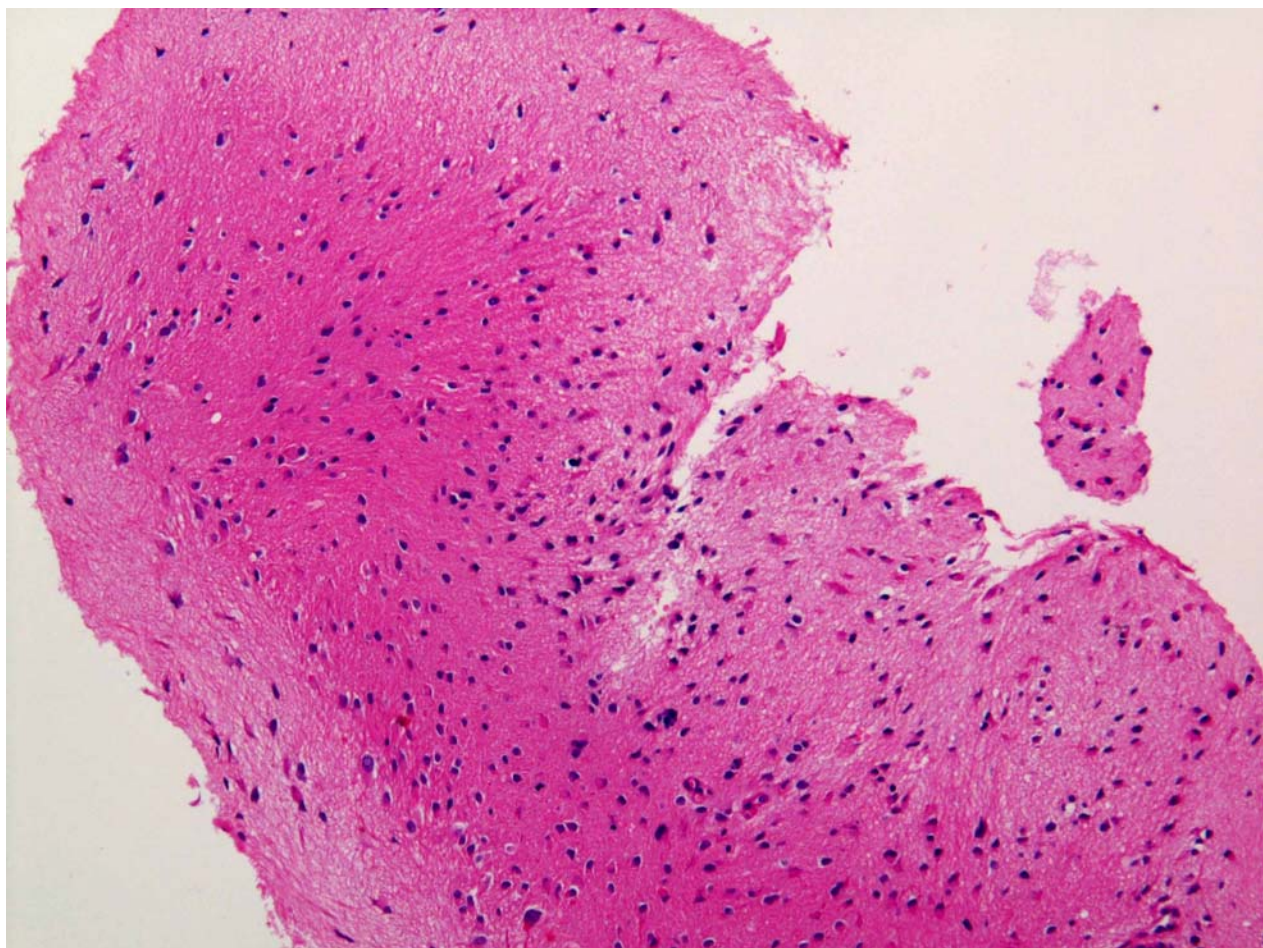


712\_ミクロ#1



712\_ミクロ#2





712\_ミクロ#3